



玻璃物語

双蛇宮

国書刊行会

(6/20刊・¥2500)

中世の日本（と思われる時代）、空木の上は難産の末、玻璃の珠を産み、死ぬ。この物語は、その不可思議な珠を覗きこんだ貴族孔雀院が、珠の中に写る複数の人の運命を体験する、という形で進められている。

金髪の異界の娘に変じた空木の上、思いが高まり鉄虫と化した男、詩人と啞の妻等々、直接関係のない個別のエピソードから成り立っている。物語は寓話的に教訓を含ませたものが多いようだ。

総頁数一八〇頁ほどの長篇で、各々のエピソード自体は長くはない。そのために、やや印象が散漫になってしまっているようだ。しかし、物語としてはまずまずのまとまりがあり、破綻もない。そういう意味では、特に問題はないのだが、ただ、本書のあとがきにあるように「三島由紀夫の天人五衰の果てを出発点とした」にしては、各エピソードの書き込みやイメージの喚起力が不足しているのではないか。

作者のペンネーム双蛇宮は、夫婦作家の合作であるという意味（男Ⅱ青蛇宮、女Ⅱ白蛇宮）。

（後）